HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー&ルックマン）を読む（その7）
Author(s)	長島, 美織
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 78, 85-102
Issue Date	2025-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94452
Type	departmental bulletin paper
File Information	78_04_Nagashima.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究ノート】

スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマン）を読む（その７）

長　島　美　織

１．読解題材としている書籍とスタディ・クエスチョン・メソッドについて[1]

このシリーズで取り上げている古典は、Peter L. Berger と Thomas Luckmann による『The Social Construction of Reality ― A Treatise in the Sociology of Knowledge』という書物で、1966 年にアメリカで原著が出版されています。その後、1977 年に最初の日本語訳が出版され、さらに、2003 年に、『現実の社会的構成―知識社会学論考』という、より英語の原題に近いものに改題され現在に至っています。ここでは、2007 年の新版第 3 刷を使用しています。以下で対象書籍の著者たち、つまり、Peter L. Berger と Thomas Luckmann を指す場合には、B&L という表記を用います。また以下の引用は、ことわりのないかぎり、この対象書籍からのものとなります。

さて今回も、スタディ・クエスチョン・メソッド（Study Question Method）を用いて読解を続けていきますが、（その１）[2]、（その２）[3]、（その３）[4]、（その４）[5]、（その５）[6]、そして（その６）[7] に引き続き、この（その７）では、第Ⅲ部「主観的現実としての社会」の最初の章、「現実の内在化」を読んでいくことになります。第Ⅰ部は、日常生活の現実を通して、日々の現象、私たちの知識とことばの構造、そして主観的世界と社会的行為との相互作用について主に現象学の概念を駆使して、記述的な分析を行いました。続く第Ⅱ部では、制度という概念を中心に、制度化の始まりと進行、そしてその維持について、弁証法に基づく分析と主張を読み解きました。今回扱う第Ⅲ部第１章では、どのように現実が内在化されるかについて、ミード（George Herbert Mead：1863 年 2 月 27 日～1931 年 4 月 26 日）の理論をもとに考察し、いかにして主観的現実としての社会が構成され、内在化されているかについて読み解きます。

2．Ⅲ部　主観的現実としての社会：「第１章　現実の内在化」の読解

Ⅲ部「主観的現実としての社会」の第１章「現実の内在化」は、以下の３つのサブセクションに分かれています。

（a）第１次的社会化
（b）第２次的社会化
（c）主観的現実の維持と変化

これらを順に読み解いていくこととなります。

(a)「第１次的社会化」の読解

それでは、テキスト 196 ページから読み続けていきましょう。

SQ　このセクションの最初の段落のキーワードは、「弁証法」です。復習もかねてこの段落の意味を説明してください。

最初の段落は以下のようになっています。

「社会は客観的現実として存在すると同時に主観的現実としても存在する以上、それを理論的に正しく理解するにはこうした二つの側面を同時におさえてゆかねばならない。すでに述べてきたように、これら二つの側面は、社会を外化、客観化、それに内在化、の三つの契機から成る不断の弁証法的過程として理解するとき、はじめて正しく把らえることができる。」（196）

わたしたちは毎日の生活のなかで、常に客観的現実と主観的現実を行き来していまが、これらの二つの側面においてわたしたちが体験する現実をどう社会学的に説明するかということがこの本の主題でした。そして、客観的と主観的という現実の両面は、外化、客観化、内在化という３つの契機からなる弁証法的過程として、社会を理解することで、もっとも正しく捉えることができるというのが、この本が一貫して主張している答えです。B&L はさらに続けます。

「社会現象に関するかぎり、これら三つの契機を時間的な前後関係において生じるものとして考えてはならない。むしろ社会とその各部分とは同時にこれら三つの契機によって特徴づけられるのであり、これら三つの契機のうち一つないしは二つの契機だけにしか注目しないような

分析は、すべて失敗に帰すのである。」（196）

ここで、「弁証法的過程」を、時間軸で捉えてはいけないという但し書きが入ります。外化、客観化、内在化という契機が一つ一つ順番に起こっていくといった具合に時間的因果関係として３つの契機の関係を捉えるのではなく、むしろ理論を構成する３つの特徴的な側面として考えることが必要です。社会学的には、これらの３つの契機をもって、社会現象をみることが肝要であると、B&L は、強い表現で主張しています。

「これと同じことは社会の個々の成員についてもあてはまる。というのも、個人は自己自身の存在を社会的世界のなかへ外化すると同時に、それを客観的現実として内在化してもいるからである。ことばをかえれば、社会のなかに存在するということは、その弁証法に参加する、ということを意味しているのである。」（196）

これらの弁証法は、人間にとっても重要であり、生きるということは、この弁証法的過程に参加することだと述べています。これは、おもしろい表現ですが、人間の外化欲求に始まって、制度は人間によって維持されていること、そして、人間はそれを内在化して成長していくという、弁証法的な相互関係になっているという彼らの主張から考えるとまさに成長するということ、そして「生きる」ことは、弁証法的過程に参加することというわけです。この章では内在化について具体的に見ていくことになりますが、まずは、この「生きること＝弁証法に参加」という主張についてさらに詳細にみていきましょう。

SQ　この「弁証法に参加することが生きることである」という定式化をより具体的に説明してください。

関連する部分を拾ってみましょう。B&L は、以下のように述べています。

「しかしながら、個人は最初から社会の成員として生まれてくるのではない。彼は社会性への傾性をもって生まれてくるのであり、しかる後、社会の成員になるのである。それゆえ、どの個人の人生においてもそこには時間的な機序というものがあり、この機序を通じて、かれは社会の弁証法に導かれて参加していくのである。この過程の出発的は内在化である。」（197）

弁証法への参加の起点は、内在化であると、述べています。これは、どんな個人も、新生児として誕生し、すでに存在している世界を徐々に理解し、引き継ぐことによって、社会参加への道を歩みだすという、動かし難い事実から明らかです。そして、ある程度の内在化を終えた

とき、「はじめて個人は社会の成員になる」（198）のです。このような過程が社会化ですが、「社会化」は以下のように定義されています。

「社会化とは、社会ないしはその部分の客観的世界のなかへ個人を包括的かつまた調和的に導き入れることである」（198）

この節では、この社会化の内容と構造を詳しく検討していくこととなります。

SQ　このように社会化が定義されたことで、そのなかに二つの段階を区別することが可能となります。第一次社会化と第二次社会化の定義と内容を説明してください。

第一次社会化と第二次社会化の定義は以下の通りとなります。

「第一次社会化とは個人が幼年期に経験する最初の社会化であり、それを経験することによって、彼は社会の一成員となる。これに対し、第二次的社会化とは、すでに社会化されている個人を彼が属する社会という客観的世界の新しい諸部門へと導入していく、それ以降のすべての社会化のことをいう。」（198）

第２次社会化は、人生の様々な局面でなんどでも起こりうる社会化であるのに対して、幼少のころにおこる第１次社会化は、社会化そのものであり、その人間の人生に大きな影響を及ぼしうるものとなります。

「第一次的社会化が通常、個人にとって最も重要なものであり、すべての第二次的社会化の基本的構造も第一次的社会化のそれに類似したものにならざるを得ない、ということは一見して明らかである。」（199）

個人は、第一次社会化を自分自身の力のみで成し得ることはなく、「彼の社会化を担当する意味ある他者」の助けのもとで、それを達成することとなります。この「意味ある他者」とはミードの概念で、この「意味ある他者（Significant Others）」は往々として両親であることが多いですが、自分自身での選択の余地がないものです。現代の言葉で言えば「親ガチャ」ということになりますが、これがなぜ重要かといえば、個人の社会化の大きな部分やその後の成長環境などが、決まってしまうからです。

「この世界を彼に媒介する意味ある他者たちは、この媒介過程のなかでこの世界を修正する。

彼らは社会構造のなかで占める彼ら自身の位置にしたがって、そしてまた彼らの個人的で、人生経験に根差しをもつ特性にしたがって、この世界の諸側面を選択する。」（199）

社会化は、客観的になされるわけではなく、「意味ある他者」の特性のもとになされることになります。つまり、「意味ある他者」自身の社会的基盤と、そして個人的な特性に色づけられた社会化が第一次社会化を経験する幼児にもたらされるということです。「社会的世界はこうした二重の選択過程を経て個人に〈濾過〉される」（199）わけです。こうして、下層階級の子どもは下層階級のものの見方、満足感、反抗心などを身につけ、上層階級の子どもはまたその社会基盤に特有の見方を身につけるということになります。
「第一次的社会化は極めて情緒的要素に充ちた環境のもとで行われる」（200）ため、こどもは、この情緒的環境を提供する「意味ある他者に自己を同一化する」ということがおこります。そして、「意味ある他者との同一化によって、こどもは自分自身が何であるかを知ることができる」（200）とも述べられています。これは、こどもは、自分の自我を、「意味ある他者が最初それに対してとった態度を反映する」（200）かたちで発達させるという意味です。「つまり人間は彼にとっての意味ある他者から呼びかけられた当の存在になる」（200）になるのです。そして、この関係は、やはり弁証法的過程としてとらえることが適切なものです。

SQ　次から、アイデンティティについての議論が始まります。アイデンティティ形成の過程を第一次社会化との関連を踏まえて説明してください。

「それは他者による現認と自己自身による現認との間の弁証法として、つまり客観的に与えられたアイデンティティと主観的に獲得されたアイデンティティとの間の弁証法として存在する。個人が自己を彼にとっての意味ある他者と同一化するあらゆる瞬間に存在するこの弁証法は、いってみれば、すでに論じた一般的な社会の弁証法が個人の生活のなかで特殊化されたものである、ということができよう。」（200）

ここで冒頭の「それ」は、第一次社会化の過程を指しますが、その過程は、アイデンティティ形成の過程としても理解可能です。アイデンティティにも、主観的側面と客観的側面があり、それらが弁証法的に相まるなかで、個人は、「意味ある他者」との関係性に支えられながら、かれらの世界を自分のものにしていきます。こうしてこどもは、「意味ある他者」との日常生活と愛着を通して、客観的なかたちで定義されている世界のなかでの自分の位置づけを獲得していくのです。そして、こどもは、それに馴染み、最終的には自分のアイデンティティとして主観的に身につけることになるのです。

「個人は他者の役割と態度とを自己のものにするだけでなく、この同じ過程のなかで、彼らの世界をも自己のものにする、ということである。実際アイデンティティとは一定の世界のなかでの位置づけとして客観的には定義されるのであって、そうした世界に調子を合わせることによってのみ、はじめて主観的に自己のものとすることができるのである。言い方をかえれば、自分が自分であるということの確認は、すべてある特定の社会的世界を含む地平のなかで行われる、ということだ。」（201）

このように、「意味ある他者」の存在と関わりあいは、アイデンティティ形成とともに、社会的世界に入っていくための道筋を提供するという意味で極めて重大なプロセスであるといえます。アイデンティティの確定には、ある特定の現実的な社会が必要です。その社会において、客観的に定義されたものと軋轢のないかたちで、自分のなかに自分の位置付けを、取り込むことを通して、世界と調子を合わせることができるようになったときにはじめて、その個人のアイデンティティは安定したものとなったと言えるのです。

「アイデンティティの主観的獲得と社会的世界の主観的獲得とは、同一の意味ある他者によって媒介される同一の内在化過程の二つの異なった側面にすぎないのである。」（201）

アイデンティティと社会的世界の成り立ちをこのように主観的に理解し獲得する過程は、第一次的内在化がもつ異なった二つの側面として理解できることが述べられています。このような過程を通して、次第に「具体的な意味ある他者の役割と態度からの」（202）抽象化が起こり、この抽象化が進むにつれて、一般化された他者が意識のなかで形成されるようになります。ここで、個人は、特定の意味ある他者のみではなく、他者たちとの同一化、さらには、社会とも同一化する方向に進んでいきます。そして、「こうした一般化された同一化を通じてのみ、彼の自己現認は安定性と持続性とを獲得する」（202）ことになるのです。このようにして、「意識のなかに一般化された他者が結晶化されたとき、客観的現実と主観的現実との間には調和的な関係が確立される」（203）ということが起こります。ただし、注意しておかなければならないのは、「この二つの現実は相互に対応し合いはするが、同一の外延をもつわけではない」（203）ということです。

SQ　この「主観的現実と客観的現実が同一の外延をもたない」ということをより具体的に説明してください。

なぜ同一の外延をもたないか、ということに関して、一つ目の理由は、以下のように説かれています。

「このことは、社会化の内容は知識の社会的配分状況によって規定される、という単純な理由からしても明らかである。」（203）

つまり、これは、どんな個人であっても、その社会において客観化されたもののすべてを内在化しているわけではないからです。その個人が生きている社会がいかに単純なものであったとして、個人はその社会で客観化されている知識のすべてを知っているわけではなく、その一部をその個人の社会的基盤や個人的特性に基づいて、主観化しているに過ぎないからです。さらにもう一つの理由は、以下のように説かれています。

「他方また、ここには常に社会化にその源をもたない主観的現実の要素というものも存在する。たとえば、社会的に習得される自己自身の身体についてのすべての理解に先立ち、かつまたそれとは無関係に存在する、自己自身の身体についての意識などがそれである。」（203）

具体的には、自分の身体に対する理解というのは、「長身である」「体重が標準を超えている」など、様々な社会的な客観に位置付けられた理解がある一方で、自己自身の身体に関する極めて主観的な意識も存在します。「関節の痛み」などの感覚は、主観的な意識の最たるものと言えるでしょう。これが主観的現実と客観的現実の外延が一致しないことに関する２番目の具体例です。これら以外においても、個人の性格に対する客観的現実と主観的現実も往々にして一致しないもののひとつといえるでしょう。このようなことを考えにいれると、客観的現実と主観的現実の外延が一致しないということが理解できるようになります。

「このことは、客観的現実と主観的現実との間の調和関係が決して静的で一度かぎりのものではない、ということを意味している。この調和関係は常に行為を通じて形成され、形成しなおされていくものでなければならない。」（203）

客観的現実と主観的現実が大きく異なってしまうことのないよう、我々は日々、その調整を行なっています。社会の変化が著しく激しい現代のような時代や、また人生の後半において、調整機能が鈍ってきた場合など、細かな障害が意識されることもあるでしょう。また、客観的現実と主観的現実が調整可能な範囲を超えて、大きくずれてしまった場合などは、精神的な疾患として表面化することもあるかもしれません。いずれにしても、「個人と客観的な社会的世界との間の関係は、不断の調整作業」（203）をもってしてのみ、調和を保つことができるのだといえるでしょう。

(b)「第二次的社会化」の読解

前節の第一次的社会化の議論を踏まえて、この節では、第二次的社会化に焦点を移しさらに検討を続けていきたいと思います。

SQ 「第二次的社会化」とは、どのようなことを意味するでしょうか。その特徴を表すキーワードとともに説明しなさい。

「第二次的社会化とは、制度的な、あるいは制度的に基礎づけられた、〈下位世界〉が内在化される過程である。」(210)

まずこれが定義となります。これはさらに、以下のように言い換えられます。

「…第二次的社会化とは、直接にしろ間接にしろ、分業に基礎づけられた役割に特殊な知識の獲得である、といってよいであろう。」(210)

およそ複雑さの差はあるとしても、分業のまったくない世界というのは知られておらず、だとすると、第２次的社会化は、制度的に位置付けられた分業に基づき、その下位社会（＝〈下位世界〉）[8]を内在化する過程であるといえます。具体的には、「役割に特殊な語彙の習得」が必要であり、この語彙の習得を通して、人々は、「物事の日常的解釈を構成する意味論の領域の内在化と、制度的領域における行動の内在化」(210) を行うこととなります。これらの認知的要素に加え、この下位世界に関する規範的要素や感情的要素を獲得し、さらにはこの世界に対する忠誠心や団結といったものに代表されるような集団的アイデンティティをも形成していくことになります。このような第二次的社会化に対する基本的な理解をもとに、それを第一次的社会化と比較することにより、それぞれの特徴をさらに理解していくこととしましょう。

SQ 「第一次的社会化」と「第二次的社会化」には、どのような違いがあるでしょうか。その特徴を簡単に表にまとめなさい。

B&L で最初に指摘されていることは、第一次的社会化は、自我を形成するのに対して、第２次的社会化は、そのすでに形成され自我とその形成に伴って内在化されている世界を前提として、その上にもたらされる変化だということです。

「第二次的社会化の形式的過程は、その根本的な問題によって規定される。それは常にそれに先行する第一次的社会化の過程を前提とする。つまり、それはすでに形成された自我とすでに

内在化された世界を相手にしなければならないのである。第二次的社会化は主観的現実を無から構成することはできない。」（212）

ここで、問題となってくるのは、「すでに内在化されているものと新しく内在化されるものの一貫性」（213）です。ここで挙げられている例は、たとえば、「清潔」ということがすでに内在化されている少年にとって、自分が世話をする馬を清潔に保つということは、困難ではないだとう、というものです。もちろん、その反対のケースを想像することも容易ではありますが、いずれにしてもすでに少年のうちに内在化されている「清潔」という概念と行為を前提とすることには違いありません。

このような前置きのもとに、第一次的社会化と第二次的社会化の相違についてまとめると、以下の表のようになります。

	第一次的社会化	第二次的社会化
学習順序	生物学的に定められた学習順序（一歳の子に読み書きを教えることはできない）	知識の基礎構造によって定められた学習順序（足し算のあとで、物理を）
意味ある他者	意味ある他者は必然	必要なし。人間同士の意思疎通があればOK
主観的必然性	絶対的な主観的必然性（唯一・必然の現実）	小さな主観的必然性（無視可能な現実・学校からでれば学校という現実から離れられる）

第二次的社会化においては、「獲得すべき知識の内在的な特性」（213）に基づいて、学習工程を決定できるのに対して、第一次的社会化においては、生得的に許される学習工程を踏まなければ、内在化は達成できません。さらに、第一次的社会化においては、欠くことのできない存在であった「意味ある他者」も、第二次的社会化においては、必ずしも必要ではなくなります。もちろん、それを教えてくれる教師に絆を感じるか否かで学習の進展度が異なるなど、弱い意味での「意味ある他者」がいることである下位社会への参加が促進されるといったことはありますが、相互の意思疎通があれば、基本的には、第二次的社会化は可能であるといえるでしょう。さらに、第一次的社会化においては、「意味ある他者」を唯一の現実の媒介者として理解し、「意味ある他者」の世界を世界そのものとして認識するのに対して、第二次的社会化においては、その世界への導入を担う人の匿名性が高くなり、同じタイプに属する個人であれば、代替え可能なものとなります。第二次的社会化によって導入される社会は、制度的な文脈でのひとつの世界として認識され、多かれ少なかれ代替え可能なものとなります。これらの原理的な相違は、さらなる含意を伴います。

「第二次的社会化の過程は高度の同一化を前提とする必要がなく、その内容も必然性という性格をもたない、という事実は、実際面からみると便利なものでありうる。というのも、それらは合理的で情緒的に統制された学習順序を可能にするからである。しかしながら、こうしたタイプの内在化の内容は、第一次的社会化で内在化されるものの内容と比べると、壊れやすく、あてにならない主観的現実性しかもっていないため、同一化や必然性が必要と考えられるときには、場合によってはそれらを生み出すための特別の技術の開発が必要になる。」(218)

つまりは、「意味ある他者」や感情的な結びつきを必要としない第二次的社会化は、学習順序などにおいて操作が容易である反面、内在化や現実性といった点では、その浸透が弱くなってしまう可能性があるということです。これを克服するための装置は、教育学などで多種考えられていることだと思いますが、第二次的社会化を第一次的社会化させるような工夫を援用するということが考えられます。

その一つは、第二次的社会化の過程に情緒的要素を入れるということで、たとえば、第二次的社会化の担当者が「意味ある他者」としてあらわれるような状況の設定などが考えられます。さらに社会全体の価値観に応じて、そこに埋め込まれている第二次的社会化の容易さが変化する場合も見られます。例えば、B&L の例でいうと、ローマでカソリックの僧侶になるのは自然な道のりでありえますが、アメリカ社会で、カソリックの僧侶になるための第二次的社会化を経ようとすると、人為的技巧が必要となってきます。例えば、「本場」のローマに留学するあるいは研修にいくなどということも、この人為的技巧の一部として考えると合点のいくこととなります。

最後に第一次的社会化と第二次的社会化の移行過程について、「第一次的社会化と第二次的社会に制度的に割りふられる任務の配分は、知識の社会的配分の複雑性によって異なってくる」(221) ということができます。例えば、職業の自由がなく、親の職業を継ぐことが必然的な人生となっているような社会においては、第一次的社会化から第二次的社会化という過程が自然におこるということが言えるでしょう。むしろ、そういった社会では、親や「意味ある他者」は、親から師匠へといった具合に意識的に役割を変化させる必要があるかもしれませんが、こういった社会では、家庭や「意味ある他者」の存在が人生を通じて重要な役割を果たします。一方で、近代における職業の自由や教育の制度は、また異なった結果をもたらします。

「いうまでもないことだが、近代教育の発達は、専門化された機関の保護の下で行われる第二次的社会化の最もすぐれた例である。その結果として生じた第二次的社会化に関する家庭の地位の低下は、万人周知の事柄であり、ここではこれ以上説明する必要はない。」(222)

家庭の地位の低下とともに、学校の役割の見直しに関しても、現代は複雑な問題を抱えてい

るように思います。特に、新しい技術（特にインターネットの普及と人工知能技術など）の開発に伴い、近代教育にも大きな課題が突きつけられているようです。

(c)「主観的現実の維持と変化」の読解

SQ　この節の中心的問いは、なんでしょうか。そしてそれにどのような視点からアプローチするのでしょうか。該当する文章を参照しつつ、説明しなさい。

第Ⅱ部第２章では、客観的現実としての社会制度はどのようにして正当化され、維持されるのかということを検討しました。この節では、その裏側である主観的現実に対しての正当化と維持が主題となります。主観的現実がどのように防衛され、維持されるのかがこの節の中心的問いとなります。

「社会が存続しうるには、それらはすべて客観的現実と主観的現実との間に一定の均衡を守るための、現実維持の手続きを発達させる必要がある。」（222）

前の節では、第一次的社会化と第二次的社会化を区別しましたが、本節では、より内面に議論の焦点をおいているため、第一次的内在化と第二次的内在化という用語を使い、内在化の様相を論議することとなります。第一次的内在化の現実は、第二次的に内在化された現実より、はるかに強い必然的な性格をもっていると、B&L は論じています。それは、例えば、第二次的内在化によって獲得された現実は、死といったマージナルな状況においては、あまり有意性を持たない、といったことからも理解できます。人は死に際したときに、「一人の人間として死ぬことは意味をなすが、婦人靴下販売部の副主任として死ぬことにはほとんど意味はない」（225）のです。つまりは、死に際したときには、第二次的社会化で得られた様々な行動様式や価値観はほとんどどうでもよいものとなり、第一次的社会化によって内在化された価値観や感情、羞恥心などが削ぎ落としきれないアイデンティティとして残ることとなります[9]。この点をさらに明らかにするために、日常的な現実維持と危機的場面での現状維持の二つのタイプを比較していきます。これが、この節の中心的課題（＝主観的現実の維持はどのようになされるか）に対する最初のアプローチとなります。

SQ　日常的な現実維持と危機的場面での現実維持の違いを簡潔にまとめなさい。

比較を始めるに先立ち、まず、意味ある他者とさほど重要ではない他者を区別することが重要であると B&L は主張しています。後者のさほど重要でない他者を B&L は合唱隊とよんで

います。

「現状維持機構における意味ある他者と〈合唱隊〉との間の関係は、弁証法的なものである。つまり、彼らは彼らが証言に立ち会う主観的現実と相互に作用し合うと同時に、彼ら相互の間でも作用し合うのである。」（229）

これは、例を考えると理解しやすいでしょう。つまり、夫が勤める会社での合唱隊が夫に対して敬意を払わないということが妻に知れると、意味ある他者である妻も夫の社会的価値を疑うという状況を引き起こすかもしれません。また反対に、妻が夫を敬意とともに扱うことは、従業員といった合唱隊が近くにいる場合などは特にかれらの社長に対する敬意に影響を及ぼすことがあるかもしれません。このように、意味ある他者と合唱隊は相互に作用しあうということが指摘されています。

このような前提のもと、日常的な現実維持と危機的場面での現実維持の違いは以下のようにまとめられます。

日常的な現実維持	危機的場面での現実維持
第二次的社会化が前面にでる（もちろん第一次的社会も基底にあるが）	第一次的社会化が前面にでる
さほど重要でない他者（合唱隊）＋意味ある他者	意味ある他者

SQ　主観的な現実の維持において重要な役割をはたす要因のひとつは会話だと述べられています。これについてより具体的に説明しなさい。

先の部分で日常と危機的状況を比較した際に、意味ある他者と合唱隊の行動が現状維持に重要な役割を果たすことをみましたが、さらに重要な媒体は会話であるとB&Lは述べています。

「現状維持の最も重要な媒体は会話である。われわれは個人の日常生活を、彼の主観的現実をたえず維持し、変形し、再構成する、会話装置のはたらきのなかにみることができるかも知れない。」（230）

といっても、会話を使って、直接的に、世界や制度、社会を定義したり、世界の性質について語りあうことも通常は多くないのです。むしろ、ことばの表現のなかに暗黙に前提とされているものが、当たり前のものとして世界の現実を支えているものであるといえるでしょう。

「しかしながら、会話における現実維持機能の大半は暗黙理のものであって明示的なものではない、ということを強調しておくことは重要である。大部分の会話はそれほど多くの言葉を使って世界の性格を定義したりするものではない。むしろそれは、暗黙のうちに自明視された世界を後ろ盾にして成立する。」（231）

日常の何気ない会話のやりとりを通して随時なされる確認行為を通じて、われわれは第一次的および第二次的に内在化した世界を確認しつつ、微妙に修正しています。先ほど述べたように、ことばのやりとりは、たわいのないものがほとんどであり、その直接的な命題の内容ではなく、「含意によってこの世界の主観的現実を確認する」（231）のです。「会話装置は現実を維持すると同時に、たえずそれを修正する」（231）ことを繰り返し、内在化された主観的現実に多様な要素を付け加えたり、色合いを削ったり、形を強化したりするでしょう。

「一般的にいえば、会話装置は経験のさまざま要素を〈通じて語〉り、現実の世界のなかでそれらの要素に一定の位置を与えることによって、現実を維持するのである。」（232）

SQ　主観的な現実の維持において会話が重要な役割を果たすためには、信憑性構造が必要だと述べられています。これについてより具体的に説明しなさい。

これまで見てきたように、会話は主観的現実を維持する装置として非常に有効に働きます。しかし、これが首尾良く働くためには、「持続的でかつまた首尾一貫したものでなければならない」（233）という条件があります。この条件を支えるものとして、ある種の信憑性構造とも呼べるものが必要となることが指摘されています。

「このように、主観的現実は常にある特定の信憑性構造（plausibility structure）、つまりそれを維持するのに必要とされる特定の社会的基礎と社会的過程とを拠り所としている。」（234）

例えば、人は、カトリックへの信仰の維持のために、カトリック教会やカトリック社会が必要です。もちろん、孤立しても信仰をもちつづけることは理論的には可能なのかもしれませんが、他の信者との交流や一同に集っての礼拝ができないような状況では、それは不安的で形骸化したものとなってしまう可能性があるでしょう。

「祈り、宗教的儀式、それにこれと類似したさまざまな手段を通して、古くからの彼のカトリック的な現実は、彼にとって主観的に有意味なものであり続けることができる。あるいはまた少なくとも様々な手段がカトリック教徒としての彼の持続的な自己現認を支えてくれること

もある。しかしながら、これらの手段は、他のカトリック教徒との社会的接触によって〈賦活〉されることのないかぎり、主観的には〈生き生きとした〉現実性を欠いたものになってしまうであろう。」(234)

宗教といったもっとも内面的で主観的ともいえるようなことがらであっても、それを支える社会的装置を必要とするのです。このようなことから、信憑性の構造は以下のように定義されます。

「信憑性の構造は、それなくしては当の現実が意識のなかに維持しえなくなる、特殊な疑念を停止させるための社会的基礎でもある。」(235)

SQ　この信憑性構造は、通常の行為の中に暗黙的に埋め込まれているものですが、危機的状況においては、どのように変化するでしょうか。具体的に説明しなさい。

危機的な状況においては、信憑性は強く押し出されなければならないことが指摘されています。

「危機的状況の下にあっても、現実を維持するためのこの手続きは、本質的にはルーティーンの維持の場合と同様である――ただしこの場合には、現実の確認は明言され、密度の濃いものでなければならない。」(235)

個人が危機的状況にとっさに対応する場合には、その場に応じた臨機応変な態度をとることが考えられますが、社会的な対応方法としては、儀礼的な手法が用いられることがあります。社会においては、現実の崩壊をもたらすように危機には、あらかじめ設定された手続的儀礼を含む対処方法が設定されています。たとえば、大災害のあとのモニュメント建設や式典は多くの文化で見られることだといえるでしょう。

SQ　ここまでは、主観的な現実の維持について、それを支える装置について考えてきました。しかし、主観的な現実は、もちろん、大きく変化させることも可能です。ここから、この節のタイトルである「主観的現実の維持と変化」の後半部、つまり、主観的現実の変化について考えていくこととなります。そこで取り上げられるのが「翻身」という現象です。これについてより具体的に説明しなさい。

私たちは、毎日何気なく生きている際にも、そしてどんなに社会とかけ離れて過ごしている

と感じるときも、常に客観的現実と主観的現実を行き来しつつ、主観的現実を修正しています。

「社会化に関してこれまで述べてきたことは、すべて主観的現実はつくり変えることが可能である、ということを意味している。社会のなかに存在するということが、すでに主観的現実の不断の修正過程をともなっているのである。」（236-237）

しかし、この修正過程は、通常意識し難いほど微妙なものです。そこで、この主観的現実を作り変えることが可能である、ということをより明確にみるために、B&L は、敢えて全面的な世界の住み替えともいえるような極端なことがらを例に出しています。それは、「翻身」と呼ばれ、例えば、改宗といった経験が典型的にそれに該当します。「翻身」とは、alternation の訳で、alternative はこの形容詞形です。つまり、現状とは異なる変異種というか、他のあり得た形といった意味です。つまり、改宗といった経験を例にとると、カソリック信者が日蓮宗に改宗するといった場合が、他のあり得る様態＝ alternation と考えることができます。現代的には、IT 企業の CEO が出家するといった場合もこのような大きな alternation と考えることができるでしょう。こういった場合には、社会化過程のやりなおしを必要とするわけで、これはいわば、第一次的社会化と同様の過程を再度、新たに帰属する社会で経験することが必要となります。しかし、もちろん、認知的に無の状態から出発するわけではないので、通常の第一次的社会化と全く同じというわけではありません。

SQ 「翻身をうまくやりとげるための〈処方箋〉には、社会的条件と概念的条件との二つが兼ね備わっていなければならない」（238）と述べられていますが、これらは一体どういうことでしょうか。具体的に説明してください。

先にも述べた改宗を例として、考えを進めていきましょう。まず、社会的条件として必要なものは、その個人が翻身を経験する前に慣れ親しんでいた世界に代わる、新しい信憑性構造を伴った世界です。これがその人の主観的現実のなかにも構成されなければならず、その人の世界となっていく過程が必要となります。そして、新しい世界を身につけようとしている人に対して、その世界への橋渡しをする役割を果たす「意味のある他者」も必要です。第一次的社会化の際に往々にして両親が果たした「意味のある他者」の役割をする個人です。そして、その過程をさらに有効にすすめるためには、通常、古い世界や日常から少し距離をおくことが必要となります。これは、物理的な隔離でもありえますが、概念的な隔離でもあり得ます。つまり、物理的に古い世界から離脱することが不可能なような場合には、古い世界と境界を築くために、現実には存在する他者を無効化するような形で進められることもあります。

「つまり他者を無効化するような形で定義するわけである。いまや新しく生まれ変わりつつある個人は、彼がかつて住んでいた世界とそれを支えていた信憑性構造から、もし可能ならば肉体的に、そして不可能ならば精神的に、自らを切り離す。」（240）

加えて、先にみたように、会話は、主観的現実を確実にすることに大きな役割を果たしますから、「翻身には会話装置の再組織化がともなっている」（240）必要もあることに気がつくでしょう。新しい世界においては、以下のことが起こります。

「意味ある会話における対話の相手が変わるのである。そして、新しい意味ある他者との会話のなかで、主観的現実が変えられる。」（240）

このような経験を通して、新しい世界の信憑性構造が、その人の以前の信憑性構造に置き換わっていくこととなります。そして、これをさらに強化する概念上の必要条件は、正当化装置であるということができます。

「翻身にとって最も重要な概念上の必要条件は、考え方の変化の全過程を正当化してくれる装置が存在することである。正当化されねばならないのはただ単に新しい現実だけではない。新しい現実が獲得され、維持される諸々の行程、そしてそれ以外のいっさいの現実の放棄と拒否もまた、正当化されねばならないのだ。」（241）

信憑性構造、意味ある他者、意味ある他者や新しい世界の住民との対話といった社会的条件に加えて、概念的にこれらの全ての過程が正当化されることが必要です。単に一つの現実や知識を獲得しただけで、翻身が終わるわけではなく、人はその世界で、主観的現実と客観的現実を適切に調整していかなければならないからです。人は、新しい世界への翻身に成功していくにつれ、以前の世界での経験を一つのパッケージのなかにいれ、そこから心理的な距離をとるようになります。

「翻身以前の経歴は、典型的には、新しい正当化装置のなかで戦略的地位を占める否定的範疇のもとに包摂されることによって、全面的に抹消される。」（242）

B&L が解説しているように、そのような経歴を私たちは、〈私がまだ罪多き人生を追うっていたころ〉、とか〈私がまだブルジョワ意識にとらわれていたころ〉などといった表現でひとまとめにして語るようになります。このように一つのパッケージにいれることで、これらの経験は、概念的、認識的にも、隔絶されたものとなるのです。

もちろん、このような極端な翻身と現状維持の間で中間的なタイプが存在することは明らかですので、「主観的現実の変化」を論じる上で「翻身」は理念型的な意味合いで取り上げられたと考えることもできます。

以上、第Ⅲ部「主観的現実としての社会」の第１章「現実の内在化」を読み解きました。第Ⅲ部は、「主観」的な方向から私たちの日常生活と社会を理解しようとする部分ですが、第２章は、内在化と社会構造の相互関係、そして、第３章は、アイデンティティ論を通して、この主観的現実と社会との間の弁証法的な関係についてさらに詳しく考察していくこととなります。

---

[1] 本稿が依拠するスタディ・クエスチョン・メソッドのよりくわしい説明は、以下の研究ノートを参照して下さい。長島美織、2017、「スタディ・クエスチョンで読む古典―「政治学は科学として成りたちうるか ── 理論と実践の問題」（マンハイム）を読む ──（その１）」『メディア・コミュニケーション研究』70、「「保険とリスク」（フランシス・エワルド著）を読む―スタディ・クエスチョン・メゾッドの試み―その１：第１段落から第４段落：insurance について」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24：109-124。

[2] ここで（その１）とは、以下の研究ノートを指します。長島美織、2021、「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマンを読む（その１））」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』33：85-96。

[3] ここで（その２）とは、以下の研究ノートを指します。長島美織、2021、「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマンを読む（その２））」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』34：35-46。

[4] ここで（その３）とは、以下の研究ノートを指します。長島美織、2022、「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマンを読む（その３））」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』35：95-106。

[5] ここで（その４）とは、以下の研究ノートを指します。長島美織、2023、「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマンを読む（その４））」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』36：83-97。

[6] ここで（その５）とは、以下の研究ノートを指します。長島美織、2023、「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマンを読む（その５））」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』37：55-68。

[7] ここで（その６）とは、以下の研究ノートを指します。長島美織、2025、「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマンを読む（その６））」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』39：31-47。

[8] ここでは B&L とともに下位という表現を使っていますが、これは分類上の用語であり、言うまでもなく、劣っているといった意味合いは全く含まれていません。

[9] このことに例外的な職業や身分として考えられるのは、軍人や侍といった死ということがその職業や身分と密接に関わるものかもしれません。

《SUMMARY》

Reading Classics through Study Questions: ——"The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge" by Peter L. Berger and Thomas Luckmann (Part7)

Miori NAGASHIMA

This is the seventh part of a series of attempts to propose and demonstrate a new method of reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to grapple with. The proposed 'Study Question Method' helps students read through and understand the target academic manuscript precisely and critically. The sample piece selected in this series of essays is "The Social Construction of Reality —— A Treatise in the Sociology of Knowledge", by Peter L. Berger and Thomas Luckmann. The paradigm introduced in this book later got to be known as social constructionism and has made a big influence on not only sociology but also other academic fields such as phycology, pedagogy, gender study, and science in nursing. This part 7 examines the first chapter of the Part Ⅲ, which deals with primary and secondary socialization, and how people maintenance and transform their subjective reality. It consists of study questions, and corresponding answers and comments.